

1 - 4 沿岸漁業地区の特徴と変容 - 福岡市志賀島地区調査の概要報告 -

増崎 勝敏（大阪府立東寝屋川高等学校）

今日、わが国において沿岸漁業を営む漁業者の生活と彼らの居住する漁業地区の社会は、周辺の諸環境の変化に従って、大きく変容を遂げつつある。ところが、民俗学ではこうした漁業者の生活や社会の現況を把握し、検討を加えることが看過されてきた。しかし、民俗学は「経世済民の学」であるとするならば、人々の生活文化を対象として、人々が生活上直面する諸問題に応えようとするものでなければならない。したがって、現代の変貌する生活の諸相を民俗学の対象とする視点は不可欠なものとなる。

この発表ではこうした視点に基づき、漁業地区の特徴と変容の実態を報告する。調査対象としたのは福岡県福岡市志賀島地区である。報告者は1986年より数次にわたって同地区で漁撈活動ならびに水産物販売に関する民俗学的調査を行った。その成果を踏まえ、今回（2008年7月～8月）は漁業者の生活と地域社会の変化の様相を検討することを目的に調査を実施した。

本発表では、この調査の成果のうち、特に、漁業構造の変化と、地域における諸集団、具体的には自治会、生業集団、信仰的講集団の特徴について報告し、若干の考察を加える。その内容を要約するとつぎのとおりである。

まず、漁業構造の変化については、就業者の減少と高齢化とが顕著であった。就業者の減少は漁業種類によって差異が認められ、志賀島地区の個人漁業の中心である一本釣り漁とえび漕ぎ網漁では、後者における減少幅が顕著であった。この原因は漁業者の説明によれば、えび漕ぎ網漁の夜間操業という操業形態と就業者の高齢化に関係しているとされる。

つぎに地域の集団の特徴についてであるが、まず、旧自治会は大きくみて地理的な区分に拠って組織されていた。同時に、旧自治会は生業に基づいて、漁家集落である浜方と農家集落である岡方とに分けて認識されていた。さらに旧自治会の区分は、生業的・地理的であるのみならず、血縁的紐帯に基づくものでもあった。一方、新自治会の区分は相対的にみて地理的区分に基づいたものとしての色彩が強い。また、新自治会・旧自治会とも、氏神である志賀海神社の祭祀と関わっている点から、単なる行政の末端的組織とは位置づけられない。

地域の生業集団についてみると、漁業者は旧自治会に基づく集団と、漁業種類別の集団というふたつの組織にそれぞれ所属している。前者は漁船の停泊位置といったオカでの問題を、後者は漁場の調整といったオキでの問題に関わった機能を果たす。

信仰的講集団については、同じ講行事であっても、浜方と岡方とで別組織を構成して行っている場合と、異なった講行事を並行して行っている場合とがある。前者の例としては、観音講・お大師講、後者の例としては十日戎とお日待ちがある。十日戎では漁業者が行事の主体となるのに対し、お日待ちは農家の行事として営まれている。